View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

大学と地域で創る生涯学習活動の研究 ： 後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み (3)

著者	酒井 宏三，藤原 等，高岡 朋子，菊地 達夫，中村 康子，本間 美幸，佐藤 至英，佐々木 邦子，森 一生，阿部 典英，末岡 一伯，岡元 眞理子，野崎 嘉男，林 亨，村井 俊博，北村 優明，沓澤 隆，中出 佳操，千葉 圭説，田口 智子
雑誌名	生涯学習研究と実践 ： 浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	10
ページ	75-82
発行年	2007
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002240/

浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と実践』第10号　平成19年１月
Bulletin of the Lifelong Learning Research Institute, Asai Gakuen University Vol. 10　January, 2007

大学と地域で創る生涯学習活動の研究
－後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み（３）－

A Study on Liflong Activities Jointly Organized by a University and a Community
－A Case Study of Regional Collaboration through Workshops in the Shiribeshi District（３）－

酒井宏三　藤原等　高岡朋子　菊池達夫他*
SAKAI, Khozou　FUJIWARA, Hitoshi　TAKAOKA, Tomoko　KIKUCHI, Tatsuo et al.

1　研究の目的

後志地区倶知安町におけるワークショップをとおし、地域と大学が創る生涯学習活動の内容、方法について考察する。

ここでは、学生による、後志地区の美術館・文学館等、ミュージアムロードなどの認知度、実際に訪ねた人数を調査し、地域外の人々にどの程度認知されているかにより、地域と共に創る生涯学習活動の内容の検討に資する。

また、ワークショップ参加者から、小・中・高校生に求められる生涯学習活動の内容、形態を調査し、地域に即したワークショップの内容の検討に資する。

2　研究の方法

(1)　アンケート調査Ⅰ　本学学生へのアンケート調査による後志地区の美術館・文学館、ミュージアムロード等の認知度・訪問者数を調査し考察する。

(2)　アンケート調査Ⅱ　12テーマによるワークショップ参加者へのアンケート調査をし、大学と共に創るワークショップの内容を考察する。

3　研究の内容

後志の美術館・文学館等への認知度を、若者（本学学生）に焦点を当て調査し、「しりべし

---

*本研究は表記の４名の他、次に掲げるメンバーによる共同研究である。中村康子、本間美幸、佐藤至英、佐々木邦子、森一生、阿部典英、末岡一伯、岡本眞理子、野崎嘉男、林亨、村井俊博、北村優明、沓澤隆、中出佳操、千葉圭説、田口智子。所属は、すべて浅井学園大学生涯学習研究所研究所員である。

ミュージアムロード」が地域と地域の活動を面として結ぶ可能性を探り、またその中でのワークショップの在り方を、小・中・高校生の発達段階に応じた活動内容、親子のつながりを広げる方向で考察する。

(1) 後志地区「しりべしミュージアムロード」･文化施設等の学生の認知度等調査

① 調査の主旨

後志地区の倶知安町、ニセコ町、共和町、岩内町、蘭越町の五町は、羊蹄山・ニセコ連峰の自然や温泉、そこでのスキーやラフティング・カヌー活動、また美術館・文化館等の文化施設等とを相互に関連付けて、観光に結びつけようと、「しりべしミュージアムロード」の命名をし、その振興を図ってきた。

特に、美術館・文学館の入館者が減少している中、「しりべしミュージアムロード」は自然や温泉を、またスキー等の野外活動のために訪れた者を、文化施設等にも足を運ぶことへの期待は大きいものである。そのことが、それぞれの町における生涯学習活動への刺激となることが望まれている。

しかし、これまで冬の集客数が多かったスキー客には、ミュージアムロードは一部冬期間閉鎖されるため、この道を巡ることはできない。しかも、スキー客が減少傾向にあった。

ただ、近年オーストラリアを主にした外国から訪れる者が増えてはいるが、文化施設等への集客を図ることは、より以上に難しさが伺えるところである。

けれど、幸いにも、ラフティング･カヌー等の夏季を中心とする野外活動が盛んとなって集客数が増え、この道の命名の契機にもなり、増加傾向にあることで生かされている。

そこで、「しりべしミュージアムロード」は、どの程度浸透しているのか、併せてこの地区の美術館・文学館等は、どの程度認知されているかを調査した。

② 調査方法・調査対象

文化施設等の入館者数の減少要因の一つとして、主に美術館・文学館はその芸術家・文学家の生涯、作品等の展示が主で、小学生、中学生、高校生の発達段階に応じた展示物が用意されていないのがほとんどではないかという仮説が考えられる。

小学生・中学生・高校生の心を揺さぶるような展示を意図していることは、まれではないか。多くの美術館・文学館は、作品の展示・解説・作者の生涯を完結されたかたちでの展示となっている。

つまり、小学生・中学生の子どもを感動させる展示、また子どもが参加できる体験活動があることにより、発達段階が進み高学年になって、また成人し（友人や恋人を誘って）さらには、親になって子ども連れてきたいと思わせる魅力があってこそ、入館者がリピータになるのではないか、とういうことが見落とされてはいないかという仮説となる。

そこで、この「しりべしミュージアムロード」･文化施設等の認知度調査については、

調査対象者を本学学生とし、アンケート方法で実施した。

・調査対象者　本学生涯学習システム学部、人間福祉学部（1～4年）
　　研究員2名（酒井宏三、本間美幸）の授業聴講学生から任意に依頼
・調査方法　無記名アンケート方式（質問用紙による選択する質問方式）
・アンケート数　有効回収数　298

③ 調査の結果

表1　「しりべしミュージアムロード」に関わる学生の認知度調査結果

(N.239)

アンケート項目	人　(%)
「しりべしミュージアムロード」の名前を聞いたことがありますか	12 (5.0%)
「木田金次郎美術館」の名前を聞いたことがありますか	32 (13.4%)
「木田金次郎美術館」に行ったことがありますか	12 (5.0%)
「荒井記念美術館」の名前を聞いたことがありますか	21 (8.8%)
「荒井記念美術館」に行ったことがありますか	5 (2.1%)
「西村計雄記念美術館」の名前を聞いたことがありますか	13 (5.4%)
「西村計雄記念美術館」に行ったことがありますか	5 (2.1%)
「小川原脩記念美術館」の名前を聞いたことがありますか	4 (1.7%)
「小川原脩記念美術館」に行ったことがありますか	4 (1.7%)
「有島記念館」の名前を聞いたことがありますか	34 (14.2%)
「有島記念館」に行ったことがありますか	7 (2.9%)
「倶知安風土館」の名前を聞いたことがありますか	2 (0.8%)
「倶知安風土館」に行ったことがありますか	2 (0.8%)
羊蹄山・ニセコ登山をしたことがありますか	42 (17.6%)
尻別川などでカヌー・カヤック体験をしたことがありますか	12 (5.0%)
尻別川などでラフティング体験をしたことがありますか	11 (4.6%)
羊蹄・ニセコエリアでの宿泊体験をしたことがありますか	56 (23.1%)

④ 考　察

ア　「しりべしミュージアムロード」の認知度

5.0%の学生にしか知られていないことで、「木田金次郎美術館」を訪れた数と同じである。スポーツ・芸術を専攻する学生もいる中で、倶知安・ニセコ・岩内各町でのスキー、岩内・共和・倶知安の各町にある美術館についてはある程度認知しているこ

とからの予想よりも認知度ははるかに低い。

点としての各施設を、点と点を結ぶ相互に関連づけた活動からさらに、面としての機能を意図した「しりべしミュージアムロード」は、本学学生への浸透は図れていない。

イ　各文化施設等の認知度

「有島記念館」(ニセコ町）と「木田金次郎美術館」(岩内町）の認知度は、14.2%と13.4%であり、ほぼ同じであった。この認知度を多いとするか、少ないとするかは、他の大学の学生との比較などが必要であるが、決して高い認知度とは言えない。

次に、「荒井記念美術館」は8.8%、「西村計雄記念美術館」は5.4%と、「荒井記念美術館」が、少ない数字ではあるが若干多かったのは、岩内町出身の学生が調査した2学部に12名在籍してることと関連があるものと予測される。

次に、「小川原脩記念美術館」の1.7%、「倶知安風土館」の0.8%と、極めて低く、2館とも、訪れた学生数と同じであり、実際に訪ねた者にのみしか認知されていない。

ウ　各文化施設等への訪問度

表2　学生の文化施設への訪問度

(N.239)

施　設　名	訪問回数人(%)	認知数人(%)
「木田金次郎美術館」	12（ 5.0%）	32（13.4%）
「有島記念館」	7（ 2.9%）	34（14.2%）
「荒井記念美術館」	5（ 2.1%）	21（ 8.8%）
「西村計雄記念美術館」	5（ 2.1%）	13（ 5.4%）
「小川原脩記念美術館」	4（ 1.7%）	4（ 1.7%）
「倶知安風土館」	2（ 0.8%）	2（ 0.8%）

この表から、訪問数が少ないことがわかるが、「有島記念館」は、知っている数に対して、訪れた数が特に少ない。

その原因として、文学作品を読んだ経験のないことが予測され、また、「木田金次郎美術館」と「有島記念館」を知っている数がほぼ同じであることは、両者の結びつきを知らされていることも予測される。

その両者を結びつけるものとしての「しりべしミュージアムロード」は、認知数、訪問数とも、本学学生に影響を与えているとは考えられない。

理解・啓発のPRが必要か、画家・作家が若者に関心を持たせる存在ではなくなっているのか、仮説のように小・中・高校生に魅力的ではなく親が子どもと共に訪れたい企画・展示ではないなど考えられるが、その原因については、本調査の目的ではない。

次に、後志地区の文化施設への訪問数と、カヌー・ラフティングなどの野外体験回数は、5.0%と4.6%で、ほぼ同じである。

このことは、若者を中心に人気が増していて、夏季の倶知安・ニセコの集客数が冬季を上回った現状からすると、体験数としては、大変少ないと言える。とりわけ、若者を中心として人気が高まっている体験であるのに。

(2) ワークショップ参加者による生涯学習活動の内容調査

① 調査の主旨

倶知安町において、12のワークショップを実施し、429人の参加者があった。

実施にあたっては、町と大学をつなぐ、世代をつなぐ、親と子をつなぐ、生涯学習活動と地域の産業（農業・観光等）をつなぐ方策を見いだそうなど“つなぐ”と、参加者とは同じ目線で“楽しく”の言葉を大切にして取り組んだ。

造形、絵画分野をはじめ親子で参加できるワークショップ、歌唱、朗読分野での親子・世代が共に活動できるワークショップを企画した。

その際、地域のニーズを汲み取ったワークショップであったかを調査するため、ここでは、小・中・高校生の生涯学習活動の内容に焦点化した。

小･中･高校においては、総合的な学習の時間が創設されたが、学校五日制による授業時間の削減等から、地域の文化施設、後志地区においては特に美術館・文学館での活動が増えているとは言えない。むしろ、図画工作・美術においては、授業時数の確保のため美術館への児童生徒の入館が減り､双方の工夫が求められている状況にあると言える。

そこで、ワークショップ参加者に、地域の小・中・高校生の生涯学習活動について調査し、ワークショップの在り方に資する。

② 調査対象者・調査方法

・調査対象者　ワークショップ参加者

・調査方法　各ワークショップ終了時に、アンケート用紙による調査

・アンケート数　回収数115名

③ 調査の結果

ア 文化活動の満足度について

「この町の文化活動についてどう思いますか」について調査した結果が表３である。（回答者数　115名）

表３　文化活動の満足度

選択項目	小学生のための文化活動（%）	中学生のための文化活動（%）	高校生のための文化活動（%）
十分にある	10.4	8.4	5.7
ある程度あるが工夫必要	36.5	36.4	33.2
もっとほしい	51.3	53.3	58.5
まったくない	2.6	2.8	4.7

生涯学習活動について、量的には、小・中・高校と少しずつ減少しているが、50%近くが準備されれていることを認め、過半数がもう少しほしいと言うように、ほぼ半々となっている。

しかし、量的にあるとした中でも、その多くは工夫が必要と、改善を求めている。

それは、自ら改善することよりも、長年続いていることのマンネリの改善を他者に願っていることが次のイから伺える。

イ　文化活動の内容について

「この町のどのような人との活動を望みますか」(２つ選択) について調査した結果が表４である。(回答者数　105人)

表４　文化活動で共に活動を望む対象者

地域の人と一緒の活動	80（人）
専門家との活動	53
親子との活動	36
ほかの町の人との活動	23
子どもだけの活動	16
その他	2
計	210

「地域の人と一緒の活動」が圧倒的に多く、地域住民同士の内容の濃い人間関係を求めていることと考えられる。

一方で、その内容の改善については、アで求められているように、専門家による活動の豊かさ・楽しさを望んでいる。

また、親子一緒の活動は、３番目に上げられているが、１～３位までの要望は、今回のワークショップの意図と合致している。

このことから、ワークショップの参加者は、地域のつながりと、親子のつながりを重要視していることがわかる。

そのコーディネーターとして大学が地域と共に創る意義があると思われる。

ウ　望ましいと思われる文化活動

「どんな文化活動を望まれますか」(２つ選択) について調査した結果が表である。(回答者数　115人)

表５　文化活動の希望内容

心を豊かにする活動	86（人）
家ではできない体験学習	63
昔のくらしを知る体験活動	33
社会で問題になってることの活動	24
手をいろいろ使う活動	13
今のくらしを知る体験活動	11
計	230

やはり、現在の子どもを取り巻く問題、青少年のさまざまな状況から、心の在り方、生命の尊重など、心の豊かさにつながる活動が一番にあげられている。

エ　心を豊かにする体験活動として望むもの

「心を豊かにする体験活動として望ましいもの」(3つ選択) について調査した結果が表6である。(回答者数　115人)

表6　心を豊かにする体験活動として望まれるもの

さまざまな人の話を聞く	59 (人)	ものづくり	34 (人)
音楽活動	58	職業体験	20
本を読むこと	57	絵画・彫刻体験	6
ボランティア活動	45	俳句・短歌・詩を学ぶこと	5
福祉関係の体験	35	その他	5
		計	324

さまざまな人の話を聞く、音楽活動、本を読むの3項目が、ほとんど同数でトップにあげられている。

人の生き方について話を聞いたり、本をもとに考えたりする活動を重視していることがわかる。また、音楽活動は、真狩村出身の作曲家八洲秀章の唄、留寿都村の親娘像の赤い靴の唄を後志地区において親子で、さらに次の世代に残したい文化財としてワークショップで取りあげたり、中・高校生・一般を対象に楽器の楽しさを知ろうと吹奏楽のワークショップを実施したことによるものと考えられる。

④　考　察

アンケートからは、小・中・高校生の生涯学習活動として、改善を求めたり、これまでにない別の活動を求めており、とりわけ心の豊かさに関わる活動を、小・中・高校生の発達段階に応じたものとして工夫が求められると考えられる。

また、親子、地域の人と一緒になった活動を求めており、親子・世代間のつながりのある活動の構築が必要と考える。

4　おわりに

本学の各ワークショップの内容・意義・魅力を、地域の方々へ周知することの難しさを実感し、参加者の多少に戸惑いながら実施してきた。

各ワークショップをとおし、生涯学習システム学部生涯学習研究所として、本大学が地域と共に創る生涯学習活動の在り方を改めて明確に認識された。

(1)　地域の生涯学習活動が、さまざまな分野・活動との関わりを持って構築される視点により具体的に研究されることが必要であること。

(2)　文化施設は、地域の子どもの発達状態に応じた心豊かにする活動の工夫により、親子や世

代をつなぐ活動を構築することが望まれ、地域で誇れる活動は、地域外の親子を呼び込むことで観光などと結びつき、文化施設へのリピータを広げる可能性を有すると実感されたが、その構築方法の研究を十分に深めること。

(3) ワークショップへの本学学生の積極的な参加を図ることは、小・中・高校生のモデルとして重要であり、また生涯学習システム学部の教育目的に合致しており、そのために必要な学生の育成の在り方、また単位認定の方法など検討・研究が必要であること。